

日常の「日本文化」を「外」にむけて語ることの政治性

吉田 光宏

序

「日本のことをよく知らない」という認識が学生たちの間に暗黙の了解として存在する。だが、いかなる地域社会においても、文化人類学では若者の年齢にもなれば、多様な経験を受ける中で既に、彼女たち彼等たちは「文化化(enculturation)」され「知っている」という大前提がある。この「文化」とは戦後アメリカが日本を理解するために派遣され研究して著名な文化人類学者ルース・ベネディクトの言う日本人であることの「前提 (assumptions)」である (1967 [1946])。日本人が日本人として暗黙の了解としているもの、生まれ育つ中で刷り込まれた価値規範や規律、社会全体で共有され求められているものである。この「文化」は自己にアイデンティティの感覚を対象社会で形成するものでもある。

知の「フィールド」としての大学において、一枚岩的に固定されたものなどではない「日本文化」を伝えていくために、多様な視点からその現れ方を照射させていき、その浮かび上がる姿や感じ取られる感覚を言語で伝えていこうとする時、実際に当事者達が経験するものとはいかなるものだろうか。学生たちは、自分たちの暗黙の了解である「前提」を「語る」ことができるのか。

私が大学において教えているものの中に、文化人類学的視点から現在の日常の「日本文化」について批判的に考察することを意図として、一年間の前期と後期に分けた二つの科目をデザインしたものがある。この授業を貫くものは、グローバルな環境において「日本」がいかに語られているかを探り、海外のメディアなどいかに日本人像が表象されているかも検証した上で、その根底に縦横に作用している権力関係を暴き、それを批判していくというものである。同時に、

「日本文化」について日本人自身が「語ることができるか」という、欧米を「中枢」とする学問の一つである文化人類学内部では、外部者である「他者」に向けて、「内部者」である「ネイティブ」は「自ら」の前提を把握した上で語ることには困難であるという固定観念への批判にも結びつくものである。こうした脱構築的な批判をしていくという姿勢について、学生達は実際にいかに実践していくことができるのだろうか。その実践を巡り、いかなる人間性が浮かび上がっているのだろうか。参加者である学生達はいかなる「声／ヴォイス」を省察的に展開し、自らの立ち位置と世界観とを見いだすことができ、それを「他者」に「語ること」はできるのか。時間軸の流れの中で、「外」からの「他者」との相互関係を通じて、どのような感情のうねりが構築されていくものであるのか。現代の日本人のアイデンティティそのものを「外」にむけて説明していくときに求められているものとは何か。文化人類学では一九八〇年代後半以降、自文化を「他者」として捉え省察的な研究がなされてきた。この論考で研究対象としての「フィールド」は、文化の多様性を生成するコンテキストとして捉え、その諸文化を創造していく互いに関わりあう人達が構築する磁場であるという視点をとる(Gupta&Ferguson 1997)。つまり、教室そのものを多様な価値観と自己の知的立場を戦略的に構築しようとする感情が

錯綜していく「フィールド」として多様な形で幾重にも重なる複数の文化的意味が構築されている「テキストの集合体」と捉えていくことができる(ギアーツ 1987 [1974])。そして、日本人学生たちと海外からの学生たちとの相互に理解する試みには「権力の作用」が多様に生成され、避けがたく、両者ともに孤独感と一体感、葛藤と安堵、不満感と自尊心という矛盾した情動の揺れを伴うことを論じる。

1 構築されるオリエンタリズム像への抵抗的スタンス

春から夏にかけて、およそ四ヶ月に渡る前期の「日本文化」に関する学部生に向けての授業は、日本語による講義形式のもので、日本人学生に対して、グローバル環境において、現代の日本人が多様な形で持つ「前提」をいかに「説明できるか」を検証するコースとしてデザインしたものである。グローバル言説の中心となるのはエドワード・サイードによって告発された偏見像としての「オリエンタリズム」である(2001 [1993])。この「西洋」が「東洋」に対して望む知の体系としてのオリエンタリズムの視点がヨーロッパで一九世紀以降形成されていったものであることを理解し、その捉え方や表象の在り方が、「西洋」によって構築された捏造物で、支配や威圧のための政治的作用が伴うことを

検証する (ibid.)。そして、そうした西洋的な理解における「日本」がいかに誤りであり、その「眼差し」に対して、いかに批判的に臨んでいかなければならないのか、という問のみならず、表象された文化と政治的意図との「連携関係 (アフィリエーション)」を暴いてみせるというのが講義の前半の目的である¹⁾。学生達が、オリエンタリズムがいかなる概念で、その「知」にいかなる政治的作用が絡んでいるかを理解すると、即座に自分達自身の国内外での体験を省察することを試みる。オリエンタリズム批判としての具体的な日本を説明する視点や理論的考察は講義後半で行っているが、前半においては、いかに「日本」が誤解されているかを体感することにより、「自分達」が自らの視点を自らの言葉で語り出すことの重要性和必要性を知る。なぜなら、そうした「外」からの「日本のイメージ像」は、自分達が理解している日常の生活世界とはかけ離れており、そこに照射されているのは、アメリカに拠点を置くメディア産業や映画制作配給を担う企業が表象していくもので、「西洋」とは「異なっている」「有色人種」として捏造された「東洋」で、そこに、「白人」中心的な政治的な企てである未完の帝国主義が絡んでいることを思い知るからである (ibid.)。そうしたイメージ像の背後にある政治的意図の脱構築のための戦略的検証を講義の前半で行い、その考察をレポートの課題の中心的テーマとしてい

る。このレポートの課題はオリエンタリズム批判を実践する場として、英語圏のメディアなどで表象されている日本人像がいかに描かれているかを暴き、それに対していかに批判していき、その姿勢の意義を検証することを趣旨としたものである。学生達の「書く」という行為から汲み取られる「声／ヴォイス」から伝わるメッセージとは、オリエンタリズム的眼差しへの抵抗である。以下、一連の政治的作用を暴いてみていった学生達からの力ある具体例を挙げていく。

毎年開催された「ミス・ユニバース」において構築される女性像は、資質や知性や感性なども基準になるが、水着審査があることから「性の商品化」に通ずるとして反対されるものでもある。これはアメリカの不動産王として一九七〇年代から知られており今や大統領の立場になったドナルド・トランプが出資したものであった。ここには日本人女性も毎年選ばれており、たとえば、二〇〇六年代表の知花くらら、二〇〇七年代表の森理世、二〇〇八年代表の美馬寛子など、その選ばれた女性達から伝わるイメージは、一人の女子大学生の視点から見ると、普段日常生活において好感を感じられるような女性像とは大きな食い違いがあるのだ。つまり、「西洋」が押し付ける「東洋」としての「ミス・ユニバース」日本代表は、いずれも、西洋白人男性の眼差しで評価された女性像を象徴する。一人のオーディエンスとしての日本人女

子学生の視点で見れば、その顔立ちや化粧の仕方、切れ長の目、黒く長い髪の毛、頬骨の作りなどから醸し出されるものは、同性同士で「かわいい」と受け入れられるような女性像と異なると感じる。つまり「世界基準」とは、あくまで、西洋によるオリエンタリズムで構築されたものであって、日本文化の中に根差すものではないのだ。彼女達が表象するものとは「西洋に媚を売するような女性像」であり、東洋がそれに応える形で、自分を創り上げてしまふ舞台がミス・ユニバースと解釈する。世界のメディアを通じて流布されるイメージ像は、西洋人男性の欲望の眼差しで構築された「日本人女性」であり、そこにある姿はそうした眼差しに応じていくものなのだ。もはや、ここで表象されている女性は、日本の日常で肯定的に捉えられるようなものでは必ずしも無い。街を行き交う日本人の若者達が「懂れて」様々に具現化させるファッション、スタイル、雰囲気とはかけ離れてしまった姿である。「ミス・ユニバース世界大会」などがテレビやネット上の画面で繰り上げられるそうした舞台とは華やかできらびやかなものであるが、一般の日本人女子学生が持つ美的感覚のものではないと捉えられる。大会で表現されるイメージの背後には、白人男性が欲望する「東洋の女性」を捏造しようという企みがある。そうしたことに気付いた一日本人女子学生は抵抗感を覚え、「白人男性に媚びる女性が日本人であ

る」とは「とんでもない誤解である」と。彼女の抵抗とは「日本人女性はこういう姿が美しい」という西洋人男性の押しつけに対する批判である。西洋化した日本の都市文化においても日本人として美意識があるのであり、そうした日本人としての素の自分が理想とするものを理解してもらいたいと認識している。彼女の美意識という暗黙の了解でもある「現地の視点」から考え、その「表象」がオリエンタリズム的政治性と密接な連携関係にあると批判的に捉えているのだ。

「アメリカ」によって描かれる日本人像に対して同様の「怒り」に近い抵抗感を感じさせるものは、「日本人」を登場させている映画である。例えば、『ロスト・イン・トランズレーション』という映画で、東京の都会の喧噪に迷いこむ中年のアメリカ人男性と若いアメリカ人女性との話である。この映画は二〇〇四年に製作され、ソフィア・コッポラ監督のもとで、ビル・マーレーとスカーレット・ヨハンソンを中心に日本で撮影が行われたものである。異国の大都会で仕事をする二人の不安や動揺や混乱の感情において、アメリカ人から見た様々な「日本」が表象される。例えば、登場するサラリーマンは自己をごまかすように頭を下げて慰撫無礼に名刺を出して自己紹介をしていく姿が「異文化」の分かりづらいものとして描かれる。更に、既婚男性が、仕事の後で、他の女性達と遊び、理解しがたい存在、「家庭を裏切っている」

ような「非人道的」存在として描写される。こうした「好色」な日本人像とは、英語でも直接ローマ表記で「Karusai(過労死)」として知られている「仕事中毒」のサラリーマンの日本人像の同じコインの表裏の関係にある。「冷たく」「従属的」であると同時に、「好色」で「非人道的」な「理解し難い」日本人男性像のイメージは、ハリウッド映画が好んで使うもので、他の映画にも見られる。こうした日本人男性像と対極にあるのが、白人男性が「好きな」日本人女性像である。この映画においても、一人の和服を着た若い日本人女性が主人公の「ボブ」のホテルを訪ね、関係を持とうとする光景が描かれている。ボブは驚愕するとともに当惑していく。オーディエンスとしてこの映画を見る一人の日本人女子学生は、日本人女性が「娼婦のような象徴として描かれていて非常に残念」であるとし、更に、人が特定の異性に恋愛感情を持ち、そこに性愛の感情が生まれる時とは、いかなる人種であろうと、その人の「人柄」「相性」「価値観」などであって、こうした事柄を踏まえ、もっぱら「好色」な「東洋／日本」を創り上げる「西洋人」には「日本文化への敬意は感じられない」とする。「ボブ」にとって「日本」とは金銭的になるもの以外は興味が無く、訳の分からないことが罷り通り、笑うにも笑えない陳腐な場所として映り、「理解不可能」な所であると考え、早く母国アメリカに帰国しなければなら

ないと述べる。こうした述懐は、帝国主義的眼差し、つまり、植民地宗主国が植民地に対して「従属民族」「下位人種」と位置づけていった構造と連携関係にある。したがって、そうした捏造されたイメージに対しては、反論し批判しその底流にある政治性を暴いていかなくてはならない。一日本人学生として、こうした日本人像を批判するのだが、一方で、例えば「背が高く見かけも良く家庭を愛する日本人サラリーマン」や「男性に依存しないで知的に幸せに働く日本人女性」などは「西洋」の聴衆には受けられないであろうと悲観する。換言すれば、「日本」とは「西洋」の「消費財」として形成されてしまっているのだ。

「好色な日本人」を描くのは、帝国主義的オリエンタリストが得意とする手法である。二〇〇六年に、アカデミー賞の日本人女性が助演女優賞候補に上がり話題になった菊池凜子演じる女子高校生の演技による映画「バベル」である。アレハンドレ・ゴンザレス・イリヤニトウの監督で製作されたこの作品でも、こうした同じオリエンタリズム像を捏造する装置が作用する。作品を通して、菊池凜子演じるチエコの「身体」は、都会の異常な喧噪に身を委ねるだけの「受動性」の象徴となり、若い男性と性的関係を持つとうとする淫乱の象徴となり、そして、アメリカ人夫婦のモロツコでのバカンスに大きな危機と困難を与える象徴ともなっていく。この映画の

最終的な終わり方とは、性に解放的な女子高生の「身体」が媒体となり、省察的に「幸福」は、異国の地にあるのではなく、アメリカ人の文化の価値観の中において経験されるものであり、その困難を乗り越えた上で、この夫婦は安堵感を取り戻していくというものである。こうしたアメリカ文化の価値観の再確認するための装置としての映像に、一人のオーディエンスとしての日本人女性性は、「幸福」について考え、自らに懐疑的な疑問を投げ掛ける。一体「幸福」は、アメリカの白人男性によってもたらされるものなのか、と。

確かに、アメリカ人にとって暗黙の了解となっている歴史認識は——サイドも「帝国主義的」姿勢と批判しているものであるが——例えば「世を照らす光」となる「丘の上の町」の住人としての認識、つまり、「我々」「白人」が「彼等」「原住民」を「開拓」して「新しいイスラエル」あるいは「フロンティア」を形成していくところから始まり、その宗教的政治的野望は、「異国」の「野蛮」な領土を「文明化」させていく企みと「連携」していき、従属的な状態にある人々を「民主化」させていく過程で、「未来」にむけて築かれてきているものだ（c.f. 渡辺 2004 藤本 2008）。換言すれば、こうしたアメリカ人にとっての「幸福」とは、例えば、開拓と未開、豊かさと貧しさ、文明と野蛮、民主化と従属化、勤勉と墮落、合理と非合理等々の一連の二分法のカテゴリ

リーの狭間で、絶えず一方の項を捨象していく試みから構築され、その過程において「アメリカの歴史」が語られてきている側面がある。このアメリカの言説とは対照的に、あるいは逆説的に呼応するかのようには、ハリウッド映画で描かれる日本人像は、白人夫婦の困難をもたらすような日本人男性の趣向にせよ、「仕事中毒」の日本人サラリーマンにせよ、家族を裏切るような既婚男性にせよ、苦悩と悲哀に満ちた女子高生にせよ、性に解放的な女性達にせよ、「幸福」とは程遠いものである。しかし、日本人には異なる幸福の在り方があるのであり、異なるライフスタイルに憧れるのであり、異なる理想を求めるものであるはずなのだ。したがって、もし、この一人の日本人大学生に、そうした眼差しが投げ掛けられた時には、それを否定した上で、自らの生活世界の在り方を説明していくことが重要なのだ。そうした抵抗的な姿勢で批判していくことが、「自己」であるアメリカ的アイデンティティにとっての「他者」、物質文明を誇る者たちから「善意ある眼差し」で創り上げられるオリエンタリズムの日本人のイメージ像を崩壊させることにつながるのだ。

しかし、見逃してはならないのは、こうした表象の一般の人々への作用である。オリエンタリズムの表象を「真実」と受けてしまう「西洋」の日常には、実際に「日本人女性性は性に解放的」であるという誤った認識が流布していることが起

こるのだ。そうしたオリエンタリズム像が「娯楽」のための表象、「消費財」としての表象というだけではなく、あろうことか、「真理」の前提としてまかり通ってしまっているのだ。欧米の異国の地に出かける日本人女性に、白人男性が盛んに働きかけてくる複数の学生達の語りがある。例えば、アメリカの大学において日本人の女子学生は「イエローキャブ」だという言い方にも表れる。イエローキャブとは一般にアメリカのタクシ―のことを指すが、この表現がアメリカ人男子学生と日本人女子学生という文脈において使われる時、「求められれば誰でも簡単に乗せる相手である」という性暴力の意味合いが介入する。一人の日本人男子学生がアメリカへ語学留学した時のことである。彼は、現地の男子学生から、ある時「羨ましがられ」てしまい困惑したという。曰く。「日本人の女の子は誰とでも関係をもってくれるのだから」と。本人はそうしたことを考えもしなかったため当惑と驚愕の感情に打ちのめされつつ、なんとか否定しようとする。しかし、彼等現地校の男性達は、映画の例をとり、実際にその中では、日本人の女性達は性的関係を簡単に持つし、レイプすら受け入れるケースもあるのではないかと反論されてしまう。彼は、そこには、こうした捏造されたオリエンタリズム像であると分析し、その力に「恐怖の念」を感じている。その場で、面と向かい合わせる「他者」に反論しようとする。

しても、具体的にある映像の例を次から次へと引き合いにだされていくと、再反論が困難になってしまうからである。フィクションであるにも関わらず、他者としての日本にその前提があたかも真実であるかのように迫ってくることに対応しきれず、絶えず、捏造されたイメージを信じてしまいエスノセントリズムの恐ろしさを、異国であるアメリカにおいて体感しているのである。そこでの経験を省察して蘇る感情は驚愕、当惑、反感そして恐怖である。

こうした一連の恐怖感のような負の感情は、「日本人」がオリエンタリズム的解釈という「外から」の見なされ方から構築されてしまうところからくる。「外側」から理解し難い日本社会の仕組みの中に、人と人との関係において自己の社会的立ち位置を把握して行動することがある。つまり、相手の社会的立場に応じて自己の行動を変化させ、状況に応じて喋り方や態度を変化させることが、日本の日常の文化において「前提」として期待されている。自己を取り囲むこの社会的状況とは「世間」であり、幼児の折から一定の基準を満たす行動をとるよう躾られてきている。ただ、この社会状況において逐次変化させる自己の在り方とは、欧米の独立した確固たる「個人主義」と対置されるもので、欧米的な見方では「優柔不断」、「信頼できない」、「苛立たしい」などと映る。こうした「外」から見た日本社会の在り方は、一九九二年に

出版されベストセラーとなったマイケル・クライトンによる小説『ライジング・サン』は、翌年にフィリップ・カウフマン監督により映画化され再解釈され「消費財」として制作されていった。これは、その日本人社会の在り方を徹底的に批判的に欧米中心的視点から解釈しなおし、日本人男性とは「好色」で「不公平」で「とんでもない嘘つき」と言う偏見像が描写された。上映の企画当時からアメリカの日本研究者のみならず日系アメリカ人の間で批判された。²⁾在米日本企業を舞台とするこの映画では、日本人会社役員達は影で暴力団と結びつき、金銭的な勘定のみしている冷たい存在として描く一方、「別宅」を持ち女性を囲うような性に奔放な存在としても描く。そうした「外」から解釈された「負のイメージ像」としての「日本」とは、あくまで西洋中心的に見たものであり、その文化のフィルターを通して再表現してみせたものでもある。そこには、欧米の文化の歴史に根差す「個人主義」の思想が根底に流れており、対象社会の日本人を見下ろすような「揺らぐことのない」確固たる「個人」の在り方が反映されている。その在り方は「西洋の文化構築」の一つにすぎず、普遍的なものなどではないことは文化人類学の常識である。こうしたことを踏まえ日本人学生は、それぞれの立場から主張して、自らについての「ありのままを語ること」が、「草の根レベル」の日本理解になる。理解されていく過

程で、日本人の説明や解釈が、断片的であれ、部分的であれ、その「現地の視点」の理解の地道な知の作業が求められるのだ。

「西洋」の「威圧的な」「文化のレンズ」を通じて捏造されている日本人像に遭遇する時、学生達は、戸惑い、当惑し、驚愕し、悲観し、恐怖感を味わう。そして、こうしたメディアを批判的に分析することで、日本人として登場する演技的行為に対して、強い拒否反応、嫌悪感、激しい抵抗を感じつつ、そこにある政治性を自らの言葉で考え告発していくようにするのだ。日本の多種多様な日常生活に根をおろす、様々な価値観を包含した日本人が、「滑稽」「没我的」「好色的」「非道德的」「非人間的」などと烙印を次から次へと押されていつてしまうことへの批判である。前期の「日本文化」に関する授業の前半では、そうしたオリエンタリズム像に対して、違和感を感じてもらい、その表象の在り方が日本人の多様な「現地の視点 (native's viewpoint)」から見た世界観ではないイメージが、流布している現実を認識した上で、自らの「言葉」と「声／ヴォイス」で批判していかなくてはならないことの意義、反論していかなくてはならないことの意義を学生達に訴えかけていく。

教室内で学生達に聞き届けられたメッセージとは、オリエンタリズムの姿勢を受け、偏見の眼差しを浴びた場合には、

自分達の「声」で、自分達の「言葉」で、自分達の視点を説明し、そうした見方やイメージが誤りであることを是正していききたいということであった。そうした違和感のうえで、いかに自らが自分達日本人の視点から、自分達の声で、自分達の世界観を説明していくことの大切さを認識していく。

オリエンタリズム批判の必要性の理解のもと、この講義の後半は、できうる限りその実践のために参考にしていくと効果的諸視点の検証をしていく。オリエンタリズム批判に結びつく、日本人のアイデンティティの根底に流れる文化理論や解釈の初歩的な捉え方を紹介している。決して紋切り型の日本人論におさまってしまつてはならないのだが、例えば、「甘えの感情」、「母性性」、「情緒的思考」、「精神性」、「タテ社会」、「他律的思考」、「中空構造の思想」などの諸原理がいかに現代社会の日常に多様な形で入り込んでいるかを、具体的なエスノグラフィーを紹介しながら解説をしていく。こうした原理が伏流となり多様に形成される日常の複数的アイデンティティの在り方を盛り込んでいく。こうした日本文化の底流に流れる原理や文化システムは、例えば、東京の下町の和菓子屋を家業とする職場において働いているものであり、^③会社の事務職を担う一般職の女性従業員同士でも共有されているものであり、^④幼稚園や小学校などにおいての教育や養育の観念にも表れるものである。^⑤あるいは、この支配的文化シ

ステムに「抵抗」とするというオールタナティブな形として女子高生達や女子大生達の多様な化粧やファッションの文化にも見られるものである。^⑥こうした日常生活の事例の説明は、いずれもオリエンタリズム批判をしていくための戦略的思考を培ってもらふものである。オリエンタリズムの姿では全くない大学生達の日常生活において自らのライフスタイルや経験、認識の仕方そのものをありのままの「ヴォイス／声」を伝えることは「外」からの理解へ意義ある対抗的实践である。

2 「日本文化」について日本人学生は「外」にむけて語ることはできるか

秋から翌年の冬にかけて日本人学部生と留学生との間で徹底的に語り合うことを前提とした授業は、オリエンタリズム批判を実践することも可能なようにデザインしたものだ。この授業は、主に英語圏からの学生も参加できるように設定し、日本人学生が「外」からの学生達と対話を重ねていくというセミナー形式のものである。トピックで扱うテーマは、日常生活世界の中に創造されていくもの、絶えず、新しいものをこれまでの文化と混淆させながら自分たちの文化を形成しているという文化人類学的前提としたものだ。若者達の暗

黙の了解としての「前提」の具体例をトピックとして取り上げる。例えば、ショッピング、旅行、アイドル、デイズニールンド、マクドナルド、恋愛等々を各回で扱い、日常生活において日本人が構築する文化的意味とは何かを議論から浮かび上がらせていくことが目標だ。五人から六人が一つのグループとなり、必ず日本人学生と留学生が入ることで各学生がより発言しあう対話しやすい環境を作る。また、時にアメリカからの留学生数名がクラス全体のディスカッションをリードし、そこから日本人学生が発言していく時もある。いずれにせよ、学生自身の文化の在り方の意味や理解と解釈の仕方を巡り毎回議論は沸騰する。原則として英語を使用言語とし、日本人自身が自らの文化を語ることによって、留学生が母国のメディアなど「外」からの「日本」のイメージに対し、日本人学生達自身の文化の一端を説明していくというものである。

英語圏の学生から見た日本の文化に対する考え方や見方は多種多様な一方、前期のオリエンタリズム論の講義で使う語彙を噛み砕くような具体性を帯びた発言が多々なされる。他方、日本の「若者文化」について対話をしようとする留学生達の中には日本の大衆消費文化を熟知している者達もいる。毎回のクラスで熱いディスカッションはカオス的狀況を帯びる。対話の過程では、日本人学生は感心し、驚き、戸惑い、

違和感を感じると同時に、面白がり感心したりしていく。多様な日本の若者像が浮かび上がる。前期の講義での批判的語りや、日本人が自らの文化について「他者」にむけて異論をさしはさむ声は周辺に追いやられる。むしろ留学生と日本人学生とが、互いに異質性を確かめつつ、驚きや笑いとを享受しつつ、毎回議論は展開されていくのである。この意味するものは一体何かを探る脱構築的分析に入る前に、実際の学生達の議論からの検証に入ろう。

まず具体的トピックに関するディスカッションを学生同士ですることを目的として、最初に現代の「日本文化」を理解するための視点として、基本的文化人類学的視点とエスノグラフィーの在り方の基本的な部分を私が一回の授業でハンドアウトを中心に説明をする。オリエンタリズム的視点ではない、日本人から見た日本文化の在り方を解きほぐすためのごく初歩的な視点を解説する。ここで強調していることは、この授業に参加している全ての受講生が皆、日本の日常生活を「現地の視点 (native's viewpoint)」を理解することである。いかなる文化にも優劣は存在しないという文化相対主義など文化人類学的視点の一端を自ら実践することの大切さを伝え、そのための根本的な手段として学生達がそれぞれの立場での自分たちの経験の「語り／ナラティブ」の必要性を訴える。これにより、例えば欧米からの学生が抱きがちなステレ

オタイプやイメージ像が疑問符に投げ掛けられると同時に、日本人学生は、「ネイティブ・インフォーマント」として自らの文化を相対的に捉え、自らの言葉で語らなくてはならないという使命を帯びることになる。留学生達は、自分の文化について話しても良いが、あくまで、日本人の若者文化理解のための通文化比較として語ってもらう。果たして、そうしたトランスナショナルな空間を共有し異なる眼差しと声とが交錯する中で、日本人学生達は、人類的なスタンスで、自らの文化を「語ることができ」、そしてその試みを相手に伝え聞かせることができるだろうか。日本人であることの意味が、断片的であれ、逐次相互の対話から生み出され、日本人学生の思いや感覚を欧米からの学生達に伝えることができるだろうか。

この問いを検証するために、二つの具体的なトピックに絞りたい。一つ目が今や「至る所に散在する」「マクドナルド」についてである。この例を挙げるのは、マクドナルド自体がアメリカからもたらされたものであり、それがいかに日本の文化に馴染んでいるか、あるいは日本文化の一つとしていかに構築されているかを知り語ることが目的である。二つ目が「かわいい」文化である。これは日本文化の中から生まれた感覚で、日本人の若い女性達によって多用される言葉で、その意味がいかに「外」から捉えられているかを知り、そうし

た諸視点に対していかに日本人が説明できるかが目的である。

一つ目のマクドナルドについては、日本人のマクドナルドに対する捉え方や見方や解釈に焦点をあてていくものである。そのために、アメリカの文化人類学者オースキ・ティニーによる論考を議論の土台とする (Ohnuki-Tierney 1997)。論旨は、マクドナルドは、「西洋／アメリカ」を表現したものであり、日本の伝統文化とは相対するもので、マクドナルドとは、日本文化によって具現化された「アメリカ」でもある。ある物質文化が国境を超えて輸入された場合、その物質文化のもとの意味が「変換」され、ローカルな「土着文化」によって再構築されるのである。マクドナルドでのハンバーガーとは日本の食文化の位置づけられ方では「おやつ」感覚であり、夕食としては「相応しい食べ物ではない」と認識される。白米と一緒に出される日本食が「中心的」に対して、マクドナルドのハンバーガーとは「スナック」つまり「周辺の」なものである。よって、いかに若者達が中心となり「アメリカを象徴する」ものを経験したといっても、伝統的な日本の文化価値観が変わることはないのである。食べ方や食習慣は変化するかもしれない。だが、日本人が大切と考えるものは、変化することはないのである。つまり、日本社会における「家」の概念に由来する階層的人間関係、人と

人との情緒的連帯感、思慮分別、外部に対する警戒心などは、米の共食の習慣に凝集される価値観であり、「和食」を消費する時に、こうした文化的意味を「共有」し、自らの「身体」に吸収させていき、再確認していくのである。

この議論が日本人の捉え方を反映しているものかどうかを分析するために、機会があるときは、自主的にフィールドワークも推薦している。その時にも、およそ五人で一つのグループになり、必ず留学生と日本人学生とが同行することを条件としている。問われていることは、オースキティ・アニーが言うように、日本のマクドナルドに食べに行くこととは、「アメリカ的な感覚を体験すること」なのか(Ohnuki-Tierney ibid)。また、日本人にとってマクドナルドへ行くことは「周辺の」感覚であり、米を家族と食べることが「中心的」感覚なのか等々である。フィールドワークをした学生達でも特にアメリカ人学生はほぼ一様にして言う。「日本のマクドナルドはアメリカとは違う」と。アメリカのマクドナルドは、日本のように清潔とはいえず、比較的貧しい家庭、肉体労働者、あるいは学生が食べることだけを目的に行く場所であり、日本のように、高校生達が延々と時間をかけて話し込んだり、宿題やゲームと一緒に黙々とするような場所ではないし、家族連れが歓談しながらポテトや少しづつハンバーガーを分けながら食べるような場所でもない

し、サラリーマン達が黙々とパソコンなどで仕事をするような場所ではないと。

つまり、元々アメリカから来たものが、日本文化において「日本化」されているので、マクドナルドが日本の家族的価値観の中で再構成されているのである。そこでの経験は、もはやアメリカ的個人主義ではなく、食事を共にする「うち」という気心がよく知れた家族的な仲間意識を構築するという感覚である。オリエンタリストであればマクドナルドの受け入れられ方は、受動的にアメリカからの文化を受け入れて、日本の食文化は異なっている欧米のようになり、文化は豊かになっていったであろうというものである。そうではなく、むしろ「日本化」され、日本人としての仲間意識や家族的繋がりがや、家庭的な雰囲気をもそのまま持ち込んだ「清潔な」場所が日本のマクドナルドなのである。こうした論文の読解と解釈を通じて、日本がいかに西洋の文化を「流用(appropriation)」しており、その日本化させ馴化させている諸相を実際に把握していくこととなる。日本人学生はそれを読み、理解し、無意識にしており暗黙の了解としていた文化の再発見に驚きと安堵とを感じていく。

このように日本化されたマクドナルドに対して、特にアメリカからの学生達は自分たちにとって身近なハンバーガーの文化的意味が本当に変化したのかという疑問を抱く。アメリカ

カの食文化を象徴するようなマクドナルドが日本によって「日本化」され「馴化」されたということに對して「フェアではない」と感じている者達が発言していく。例えば、マクドナルドのハンバーガーが「スナック」だと言うが、夕食時間には、ハンバーガーを始め、それぞれが皿の上にのせられたら、それは「夕食」として考えられるはずであると。したがって、単なる周辺の「スナック」として片付けてしまうのは、おかしいのではないかと問う。この姿勢の背後には、アメリカ文化の帝国主義的姿勢がある。つまり、アメリカの食文化は日本人にとっても中心的ものになりうるはずだと。他にも、仲間同士で話すのはごく少数派で、大半は、アメリカのように単に食べて、食べ終わったらさっさと帰っていることを指摘し、アメリカと同じように日本の文化にとけ込んでいるのではないかと発言する者もいる。ここでもアメリカを中心とするグローバリズム言説が展開されている。あたかも、日本人もアメリカ人のように行動しているから、マクドナルドを輸入することでより快適な食文化が生まれたのではないかという前提がある。こうして、当初マクドナルドが日本に馴化したことを目の当たりにし、なんらかの文化的衝撃や驚愕を受けたアメリカ人学生らは、その異文化での体験を自己の文化の正当性を試みようとして再解釈するのだ。一方で、実際に日本のマクドナルドでの経験談に基づき留学生から

は、サービスの良さに感心し、本国アメリカと違い、「あたかも一流のレストランのようだ」というコメントも出される。こうしたディスカッションに對して、日本人学生からは高校の時に友達と長いこと居座りよく話す場所として行った経験談や、マクドナルドを夕食にすることは、たまにはあるが「抵抗がある」と言う反論もなされる。各グループ内で、同じマクドナルドについても多様な見方が構築され異質性を抱えた形で、ディスカッションが展開されていく。

アメリカ生まれの日本のマクドナルドが意味するものは、それぞれの立場で違っていた。日本のマクドナルドの解釈を巡って、米圏からの学生らは、自分の「内」にあったものが異国の地に渡り「外」に根付くと本来の意味が解体され、再構成されていく諸相に對して驚愕し、戸惑う。が、同時に欧米中心主義的捉え方の中でも捉えようとする。アメリカ人学生にとって、元来アメリカ社会「内」部のものが日本という異国の地に移植され、異化されてしまうことで「外」に位置づけられることに對して「抵抗」し、それに呼応する形で「オリジナル」なアメリカ中心的言説を展開する。「おやつ感覚」という日本人の認識によってアメリカ人の認識が崩されることで笑いすらも起こる。

これに對し、日本人学生が日常の文化の「内」を「外」にむけて語る際、友人や家族を中心とする「内」の文化の重要

性から関連づけて認識されるファーストフードの文化のリーディングの議論に対して、日本人学生同士で類似した感覚を話し、納得感と安堵感を抱く。つまり「西洋」が「日本化」されているのだと考える。また、日本人学生にとって、自分達で当たり前だと思っていた日常の食習慣が、実は、本国アメリカでの在り方と違うことを知り、自分たちの文化で醸成された賜物であることにも驚く。この両者は平行線をたどりつつ、日本の都市の食の大衆文化というコンテキストにおいて「内」と「外」とは相互の交差する形で、議論は高揚していき、時には笑いの渦に巻き込まれ、ある時には距離を置いていく。グループに分かれて議論が展開される度に伝わる感覚は、互いにマクドナルドを巡る異なった解釈に、それぞれが違う意味での抵抗感を抱きながら、学生達の知的興奮が確かに伝わってくるのである。

二つ目の例として「かわいい文化 (cute culture)」を取り上げる。「かわいい」という言葉は女子大生や女子高生の間で極めて頻繁に使われる言葉で、この言葉の意味を理解することなしに、彼女達の文化について理解することはできない。この語を分析するためにアメリカの文化人類学者のキンセラ (Kinsella 1995) の論文を読むところから始める。この論考の概要は以下のようなものである。日本の若い人々は「かわいい」ものが好きで、「かわいい」行動をとりたがる。

特に、結婚する前の若い女性達がデザイン、形、色などが「かわいい」とされる物を好む。この「かわいい」ものとは、幼児がそうであるように、わがまま身勝手な弱い状態をも意味している。つまり「子供のように」「依存的」な状態が続いているのである。彼女達は「かわいさ」を追求し「子供の頃」の記憶に戻ることで、「厳しい」日本社会の現実からの逃避しているのである。敢えて「子供っぽく」振る舞うことで、若者達は、責任、規律、苦勞、義理、敬意など日本社会一般に期待されている行動やモラルを避けているのである。だからこそ、「かわいい」ものを好んで買い、「かわいい」行動をとることによって、彼女達が大切であるというもの、例えば自然な状態、純真無垢な状態、純粹さ、甘さ、曖昧さなどを表現している。そして、困難に直面すると、日本人は一般に、弱みを見せることは美德にはならないとしている。だが、若者達は、困難なことに直面すると、「かわいい」文化を通して、素直に、弱さ、脆さ、脆弱さを見せることを厭わない。言い換えれば、「かわいい」行動は、伝統的な価値や労働倫理を拒絶しているという議論である。ここに「かわいい」文化には、政治的意味合いがあると分析する。つまり、「かわいい」ものに凝集される意味には「抵抗」がこめられており、実際に社会で成熟した大人が忘れているもの、あるいはそうした人々が具現化させているものとは正反対の

ものである。そこに彼女達の「かわいい文化」を爛熟させることにより、そうしたメインストリームの文化を嘲笑すらしいのだ。こうして若者文化は社会の現実への象徴的抵抗を表現していく。

私はこの議論の一つの検証のために、実際に、「かわいい」という言葉が頻繁に使われる女子高生や女子大生のための雑誌を教室に持ち込んだ。その中には例えば、いかに目を大きく見せるかという化粧の方法、髪の毛を染めたりする技巧についてこと細かに説明したものが満載されている。こうしたページを見ながら、教室内を支配する雰囲気は、欧米圏からの学生の注釈や意見からの高揚感である。彼等彼女達は問いかける。髪の毛の色を茶色にしたり、目を大きくしたりするのは、「私達のように白人になりたいのか」と。また、アメリカ人の男子学生曰く。「かわいい (cute) という場合、発言した本人には本気度が十分ではない (not serious enough)」と。そして、こうした「かわいい」スタイルなど、「自分のガールフレンドなどにしてもraitたいなどとは思わない」とする。更に言う。「女性が、セクシーであれば、本気である証拠ではないか」と。そして、「ギャルメイク」については、男性のアメリカ人学生は「下品で品位を落としている」化粧の仕方ですら「やり過ぎ」ではないかと捉える。日本人女子大学生はまだ「子供っぽく」、つまり「幼児性を保つ

たままなのではないか」とオリエンタリズム的言説が繰り返られていく。一方で、アメリカからの女性の一人は、自分は「大人」か「子供」という分類だと「大人である意識はあるがまだ経済的な自立ができていないので子供の側面も確かにあると解釈する。

こうした「外」からの意見がグループ内の中で出されていくと、ぼつりぼつりと反論する日本人学生もでてくる。「いやそれは違うだろう」と。日本人にとって、髪の毛を茶色に染め、目を大きく見せる化粧とは、「ファッションの差異の一部」であり、自分が「ユニークでありたい」、「異なった存在でありたい」、「自分のスタイルを創り上げたい」という思いがあるという。中には、「すみません。英語では伝えにくいので日本語で説明します」といきなり日本語で話しだし、留学生を当惑させる。そして、こうした感覚とは、「私はアメリカ人になりたい」という意味とは「全く違っている」とする。もしかしたら、そうした日本のファッション雑誌に載っている読者モデルに近付けるかもしれないという感覚もある。「ギャル」は意識しないが、髪の毛の色を変えたりするのは、自分に似合う、その時の気分に変える、着る服の感覚と合うから変えるという意味合いである。決して「白人になりたい」とは思っていないと言う。だが、こうした批判を覆すように、英語圏からの卓越した言語運営能力により圧倒

されたせいか、「やつぱり白人に憧れているからだと思う」と強く同意する日本人学生もでくる。あるいは、海外で現地の人から「見かけは中学生のようだ」と言われたことを考え、「やはり日本人は白人と比べて子供っぽいのだと思う」と言つて憚らない。こうして、異なつた立場から多様な解釈が展開されていく。

一人の茶色に髪の毛の色を染めた日本人女子学生に、その理由を聞かれると、はにかみつつ「*don't know*」という発言でかわし、自分の好みだというコメント以上はしなかつた。しかし、一ヶ月後に提出された彼女のレポートには、その「知らぬ素振り」とは裏腹に、高度な英語記述力で、「かわいい」文化は一つの女性同士のコミュニケーションのスタイルであると議論している。例えば、知人が髪の毛の色を染めた時や、ペンについている小さなぬいぐるみのキャラクターを見つけて「かわいい」と言うことで仲間意識を持った親しい関係を構築する言葉であるとしている。更に、互いの関係を良好にすることを前提にしていることを示しているのであるとする。仕草そのものや、その日の服装などを見てこの言葉を使用する。つまり、通常の会話で、「かわいい」という言葉を多用することは「社会関係の潤滑油 (*social lubricant*)」として機能するとしている。相手に対して不快感や不信感など決して与えないようにすることを考えての一

つの若者同士のコミュニケーションのスタイルであるとする。相手に近づけるような感覚を持たせるための友人関係を友好なものとする概念なのだ。その言葉には相手への同情心や共感も込められている。さらに、若い主婦達や働く女性達の間でもこうした可愛いものは流行つていることを指摘する。彼女達は、社会において求められている期待、役割、義務を担っている。可愛いものを購入していくことで、ストレスを発散させたり、疲れを癒してくれることも指摘する。実際に、社会に出て働き始めると、こういうものを急に集めだしてしまう働く女性達は決して少なくない。ショッピングモールにはそうした女性達をターゲットにしたコーナーが幾つも設けられており、連日女性客が賑わう光景が見られる。この「かわいい文化」とは、日常の「大変な現実」を生き残る術でもあるのだ。また、自然体、純粋性、柔らかさ、癒しなどを求めている世代に支持されて生まれた文化であるのだ。その意味で、キンセラが議論したようにグローバル社会における日本の現実への「抵抗」を示してもいると考える (*Ibid.*)。こうした自らが「能動的に」「意図的に」「新しく創った」文化を、西洋人が「外」から見て「子供っぽい」というのは、こうした現代社会での文化の意味合いを把握していないのであつて、全くの誤りであると喝破していく。こうして、「書く」という行為を通じて、教室内で、時に展開さ

れるオリエンタリズム的言説を批判的に省察し、それに見事に抗う「語り／ナラティブ」が確実に本人の立場から実践されていっている。

イギリス人女子学生も「書く」という行為を通じて、日本人の視点の理解を試みようとしながら、自らの英国文化とのせめぎあいから生成される複雑な感情を吐露している。自分の日本人男子学生と交際の経験を省察的に思考検証しているものだ。こうした「かわいい」文化に支配されている現在の若者文化に、彼女自身なんとかとけ込もうとしつつも抵抗感と当惑感を感じざるを得ないとする。例えば、「かわいい」とは日本人が女性に言う褒め言葉で、「女性的である」という意味合いがあるのではないかと解釈する。つまりそこに「魅力的」であるという意味があると考える。また、日本人男性が好む女性の雰囲気は、「セクシー」ではなく、むしろ「かわいい」スタイルの方であるのではないかと解釈する。他方、このイギリス人留学生にとって、同世代の日本人女性達が、声のトーンを高くする「かわいい」喋り方は、「イライラする (annoying)」と感じざるを得ないが、彼女の場合、次第に日本人の視点から「かわいい」文化を見ようとする。彼女が日本人の男性と交際し始め、最初に言われたことは、髪型、服装、小物などで「かわいい」センスを心がけてほしいということであった。当然、最初は面食らったが、次第に

理解しはじめ、実際そうしたものを身に付けることの意味を少しずつわかるようになる。癒しやリラククスできる感覚などである。しかし、どれほど、「彼のためにかわいくした」としても、「一日二十四時間、週七日間」そうしていることなどできないし、また、抵抗を感じざるをえないと付け加えることを忘れない。^⑦ このイギリス人女子学生の心情は、次第に日本のこうした文化的な背景を理解しようとしながらも、違和感や抵抗感を内包する状態が続いていく。下着にミッキーマウスの柄を見つけショックを覚えたり、避妊具に「リラクスマ」と呼ばれる「癒しキャラ」のクマのぬいぐるみのデザインがあることに對して、「自分には極めて気が狂う (quite crazy to me)」という感覚を覚えざるを得ない。こうした「理解が困難」で「奇妙な」文化について、キンセラ (Judd) による論文で議論されているように、それだけストレスや社会に対してプレッシャーを感じており、日本人はそうしたものに求めようとし、癒しや安堵感を抱くものに違いないと解釈する。だが、たとえ日本人と交際中で日本社会を日本人の視点から見ようとして、日本人男子学生のために「かわいく」行動しようとしても、彼女の心中は、癒しや穏やかさとは異なり、時に違和感や戸惑いなどが伴っている。しかし、そうした彼との距離感から感じるような孤独感と

は、異人種間恋愛を崩壊させてしまうことに繋がるものにはならなかった。むしろ、そうしたギャップや差異による「感情の揺れ」を楽しんでいるのだ。

「現地の視点」を取り込もうとしても「外」のそれぞれの母国の文化を身体化している留学生達には、日本人の視点（現地人の視点）を持つということは限界があることがわかる。「理解」を試みるところに、自己の内部で現代の日本の若者文化に対して当惑感や抵抗感が内包されている。だが、欧米圏の学生達によって次々と言葉にされていくコメントや解釈等々を日本人学生達は、批判的というよりは、その対話を互いに楽しみ笑いあうという雰囲気は終始変わらない。オリエンタリズムへの「抵抗感」や、その理解のあり方を是正していく試みもなされるが、同時に、その視点を踏まえつつ、留学生達による多様な「外」からの解釈との戯れから表れる文化も楽しんでいたのである。⁽⁸⁾

3 「外」に向けて語る日本人学生の試み

「かわいい」文化に関する対話でも、マクドナルドを巡る欧米圏からの学生と日本人学生とのやりとりと類似する語りだ。つまり、「かわいい文化」を「幼稚」で「子供っぽく」、「理解不能」で「奇妙」であると解釈してみせる欧米圏から

のコメントには、オリエンタリズム的感覚が流れている。しかし、トランズナショナルに展開される議論は、そうした概念が前提とする具体的な表現に対して、日本人学生が反論する者もいる。他方で、自分たちの文化の多様な解釈の仕方を楽しみながらも確認し、留学生達からの異なる認識や価値観の差異そのものを自分の中に受け止めている。

この交錯した状況について、留学生がいない時、日本人学生のみが集まることができた際に、日本語で訪ねてみた。私は問いかける。日本人は自分の文化を「語ることができるのか」と。この大きなテーマのために、グループに分けて、彼等彼女達だけでディスカッションしてもらった。すると、興味深いコメントを次から次へと展開させてみせた。何よりこの授業で驚嘆したのは、「日本のこと」を話しているにもかかわらず、留学生達は、確かに面白がって、また興味を持って話をする一方、「奇妙 (weird)」だという表現を頻繁に繰り返して、日本人学生達が話をして、自分から見た日本文化を語っても、なかなか「現地の視点」としての「日本」の多様な在り方が伝わらなかったことを語る。例えば「かわいい文化」は、アメリカ人学生には、「子供っぽい」文化としてしか映らず、「かわいいギャル」の化粧にしても「濃すぎ」で「不適切」であり「下品」に見えると「外」からの解釈を受けるのみで終わった。そうした言葉は、明らかにオリエン

タリズムの言説であり、是非とも彼等彼女達の「現地の言葉」によって内側の視点から説明していくべきであるのだが、敢えて、そうした言説の聞き手に回っていかざるをえない「空気」があったと言う。ここには、留学生達の多くは「聞こう」とする姿勢が欠けていたことも推察できる。そして、「外からの日本のイメージ」や「外から見た自分たちの文化」に対して、どういう解釈が成り立つのかを知ることそのものに知的興味を持って毎回楽しみに参加していたとも付け加えた。自分の視点から見た当然視していた文化が、海外からのそれぞれの視点が錯綜することで、また違った「日本」の捉え方が多様になされていること自体に知的興奮を覚えてもいるのだ。

他方で、彼女達が指摘するのは、欧米人と議論する際、本来反論や異論を述べなくてはならないような時、日本人は困惑してしまい自らの立ち位置を不利な状況に追いやってしまう価値観が日本文化にはあるということだ。自ら謙虚な姿勢を持ち、相手に対して敬意をもって接するという一つの日本人の「他律的思考」の精神に根差す美德で、反論を困難なものにするのではないかとしている。例えば、ベネディクトが指摘した日本人の一つの美德——相手の立場を一步譲り、認めた上で、自らの立ち位置を把握していく姿勢、いわゆる「自重」する感覚——は、欧米の「文化のレンズ」で見れば

受動的で抑圧的であるというオリエンタリズム像と重なってしまうのである。したがって、日本においては、いかに日本文化自体がオリエンタリズム的な眼差しで捉えられていると理解しても、その映像やその人の立場や視点を理解しようとする意志が、敢えてそれを是正しようとすることへの妨げになるのではないかと考察する。日本人が大切にしている「思い遣り」という精神が、皮肉にも自文化としての日本と異文化との間に相互理解に困難な溝を深めてしまうのではないかという悲観論も持つ。一度、他者から、オリエンタリズムの眼差しや解釈が投げ掛けられた時、それに対して、反論を實踐して対立してみせようとする「反骨精神」のようなものがないかなか生まれにくい文化的土壌があるということを日本人学生達は感じていたのだ。確かに、このような「外」からの見方に反論していこうとする日本人学生もいた。ただ、欧米圏からの学生との対話を通じて、オリエンタリズム批判を敢えて行わないということで、日本人学生自身は「暗黙の了解」とする日本文化の一つの美德を無意識に実践したということになる。彼等彼女達が「隠忍自重の感情」を確認するということ、お互いに「情緒的繋がり」を形成し仲間意識を形成すること、そして、「甘えの構造」をお互いに作り合うということ、いずれも無意識の日常において「暗黙の了解」としてしている原理を實踐することで「沈黙」をしたり「聞き手」

にまわっていったりしたのだ。つまり、外部からのオリエンタリズム的視点を理解してはいるが、それに対して敢えて批判や反論などしてしまうことは、日本人としての価値観から逸れてしまうのではないかと考えたのである。確かに、欧米中心的解釈を突き放す形で、それを一つの解釈であるという見方をすることもできるが、それでは、他者のエスノセントリックな視点を正していくことは困難になってしまう。

更に、「理解」というものの根本的な在り方の「限度」についても考えていたことを日本人学生達は述懐する。日本人の仲間同士で共有できる感情などは、いくら説明しようとも「外」からは理解はできないと考えていたのだ。学生達が例を挙げるのは、「かわいい」という感覚を全く無関係な資質をもったものと混淆させる造語から醸し出される感覚である。彼女達同士で伝えあう「かわいい」感覚は、たとえ言葉で説明したとしても「理解してもらえないような感情ではない」としている。例えば「癒し」の感覚と「大人っぽい」という感覚とを混合させた「大人かわいい」というイメージにせよ、「エロス」という感覚と結びつけ「エロかわ」という意味合いにせよ、「ブサイク」という感覚と融合させ「ブサかわ」という雰囲気になせよ、彼女達が読み取る感情を「理解する」ことは不可能であると発言する。たとえ言葉で説明できたとしても、彼女達が「創り上げる」「新しい」意味合い

など「理解してもらえない」としている。つまり、「感情」や「感覚」を言葉で伝えることは難しいし、たとえ、言葉で説明したとしても、自分達の感情まで理解され共有されることは不可能であるという文化理解の根源的問と結びつけていたのだ。⁹⁾

こうして、日本人学生達は、留学生からの学生との議論のなかから、日本人同士の間では日本人だけにのみ共有できる「感覚」があると考えた。授業の前半の講義で文化人類学的視点を説明し、日本の文化を日本人の視点から理解することが目的で、日本人の価値観を文化相対主義的にみることを学ぶことの大切さはもちろん把握しているのだが、実際に「交流」や「対話」の場では、それぞれのディスカッションでの無限の発言は、デリダの言う「エクリチュール」として多様な解釈を両者がともに構築していたのである(2002 [1997])。つまり、日本人自身の文化的前提をもちつつも、留学生と関わることで知ることの日本人像の多様性が生成されることをそのままに受け止め、他方で、留学生達も日本のポピュラー文化の一端を多様な解釈をそれぞれ自己に内面に刷り込まれた自分たちの文化の立場を確認しながら展開していったのだ。日本人学生が伝えようとした意味が、外国人学生のそれぞれの認識や捉え方により、異なった意味として再解釈されていったのである。

私は日本人学生と海外からの学生に向けて、随時、これまでの対話やフィールドワークからの議論を簡潔に解釈学的な視点からまとめたものを、ハンドアウトとして渡しているが、そうした教材はあくまでも参考で、彼等彼女達の対話に役立ててもらい、議論を刺激させること、日本文化の一端を省察させることが目的である。つまり、このセミナー形式の授業で、受講生に学んでほしい姿勢とは、ギアーツ (Geertz 1999 [1983]) の言う「経験に近いもの (experience near)」あるは「ローカル・ノレッジ (local knowledge)」を彼等の言葉から、日本人学生自身の経験からの「現地の視点」から語っていくことであり、その政治的意味を彼等彼女達なりに理解し租借していくことである。

こうしたことを省察的に吸収しつつ、主に欧米圏からの学生と日本人学生との相互対話——オリエンタリズム批判を意識しつつも、多様な解釈と載れる構造——を、「書く」という行為において、初めて日本人の若者文化を諸視点の理解を「現地の視点」から試みることを示していった。留学生達は、期末レポートを「書く」という行為では、クラスでの対話での日本人学生とのやりとりからの得た断片的な知識を紡ぎ合わせ、時に自己の文化と日本人の文化との闘ぎ合いを感じつつも、オリエンタリズム的表現はほとんど抑えられている。日本人からの視点を重視し理解を試みつつ、留学生と

の対話から得られた知と自分たちで認識理解したものが出されている。日本人学生も、授業内では、同時時空間を共有する場では言葉で語ることが困難であった「現地の視点」から人類学的視点を、自らの言葉で日本人の視点の一端を展開させるものも多数出されてきているのだ。ここでは、「書き手」は学生であり、「読み手」は担当教員である私と言う「状況コンテキスト」が確定しているゆえ、授業の目的と合致したものを書くという本来の趣旨を学生達は取り入れているからであると言えよう。

この「現地の視点」からの「語り／ナラティブ」は、例えば東浩紀 (2010) が主催となりアメリカの大学からの教授陣を招き「クール・ジャパン」についてシンポジウムをまとめた『日本の創造力の未来』における日本の「未成熟性」の根底にある政治性の諸相の探求と結びつく。アメリカの知と日本の知とが互いに現代日本の「かわいい文化」や日本映画など大衆文化を巡ってのシンポジウムでは、日本文化の意味の曖昧性や虚構性そのものを肯定的に捉らえる構造があることを検証している。この構造は、違和感や戸惑いを内包しながらも、日本人学生と欧米圏学生とのクラス内やグループ内でも時として双方で理解しつつも、ほぼ平行線を辿った一連の対話での多様な関係性と呼応している。両者とも直接的に帝国主義的言説を意識しつつ多様に解釈していき、対抗的なもの

も浮かび上がらせていく議論である。文化間の関係を検証する際には、すでにエドワード・サイード (Saïd 2001 [1993]) やレナート・ロザルド (Rosaldo 1989) らが盛んに主張してきているように、各地域の諸文化とは「関係性に属している」のであり、価値基準を数字で測るような「アルキメデスの視点」や「梃子の視点」のようなものなど存在しない。世界規模のコンテキストで多様に政治と文化とが絡み合う「ローカル」の現実を「内部」から複数の視点から掘り起こしていく姿勢が肝要だ。教室内で、交わることの無い日本人学生と欧米圏からの学生との間の時に戸惑いや困惑すら伴うような感情のうねりが、決して気まずい雰囲気や嫌悪感などになることなかったのも、多文化共生の根底を支えるこのような複眼的認識であろう。毎回の授業のディスカッションにおいて暖かみのある「笑い」に包まれ、授業の最終日では、お互いに写真を撮りあい、別れを惜しむ光景は毎年のように見られる。この「交流」に何が起こっていると解釈すればよいのであろうか。また、日本人学生が、海外から日本に関心をもってやってきた仲間達と同じ時空間を共有する「今ここ」という場において、オリエンタリズム批判を実践する際に交錯している知の在り方とはどのようなものであろうか。

4 「他者」との対話の脱構築

人は時空間で織りなされる言葉の網の目の中に生きる主体である。人が追い求めていくものが何であれ、その先にあるのは、無数の他者の存在である。他者から呼び掛けられ、それに何らかの形で反応しようとする自己がある。この「呼び掛け」の「声」に応えようとする感覚、他者と言葉を通してかわり合おうとする時、自己の行動について省察し、いかなる行為でこの声と行為に関与していこうとし、更に、それによって自己がいかなる状況になっていくかという思考が働く。この自己についての省察、関与していこうとする意志、現実状況の把握判断という三つの要素を伴う感覚を、ミシェル・フーコーは『自己と他者の統治学』の中で「アクチュアリティ（現在性）」と呼び、その感覚が主体の生成と変化とに結びつく¹⁰と論じている (2010 [2008])。つまり、この感覚は自己認識が新しく生成変化するための原動力ともなる感覚である。そこにおいて、その呼び掛けにおける期待、命令、規範、美德等は自己の身体に書き込まれていき体内化されているのだ。しかし、この「アクチュアリティ」とは、単に規範や期待に応える感覚だけではない。ジョルジュ・バタイユを介してフーコーは言う。そこには絶えず「侵犯」と「逸

「脱」が生まれていくのである、と。つまり、我々は日常生活においてアルチュセールの言う「呼び掛け」の声を受け、知らず知らずにヘゲモニー的主体を形成しているが、その規律規範にはなかなか叶わないことなど日常茶飯事であり、また、あえて、規則やルールから逸脱することも多々ある。ここに、主体生成における「偏差」が生まれるのである。この一連のフーコーの後期の権力論を教育現場に適用すれば、私からの「現地の視点」から理解することが目的であるという教育的「呼び掛け」は彼等彼女達なりの留学生との関係性で、再解釈され、脱構築され、限りなく「逸脱」していったと言える。同様に、留学生達が無数の解釈をしていく「声」とは、主として欧米を中枢とする言説を反映する日本人学生への「呼び掛け」であり、それらを受けて、日本人学生は関与しようとしつつ、自らを省察し、抵抗も試みつつも逸脱していったのである。そうした「偏差」としての語り合いから、学生達はどうのような文化的意味を読み取っているだろうか。

第一に、日本人学生は日々知らないうちに自分の感覚を暗黙の了解として規律規範に従う主体を形成しているところに、外部者の介入によって、その規律規範が絶対的な当然のものなどではなく、むしろ、奇妙で、驚愕してしまいそうなる「構築 (construction)」か「虚構 (fiction)」であることを学

ぶ経験をしている。その心的状態をアメリカの文化人類学者エミリー・マーティンは「内破 (implosion)」と呼んでおり、自己と他者の間には底知れぬ溝が走っていることを思い知る時に自己の文化が構築されたものの一つにすぎないと論じている (Martin 1994)。ラカン派哲学者として知られるスラヴォイ・ジジエクの概念で言えば、「今ある」自分の日本人としての見識や当然としていた現実の在り方が、一種の虚構にしがみついていたかのように思えてしまうような、何らかの「パロディ」のようにも思えてしまうという「幻想の横断」の瞬間である (Žižek 2007 [2000])。そうして、欧米圏学生からの矢継ぎ早のコメントに圧倒され、日本人はどこか「おかしいのだろうか」と思わず自分達も笑ってしまうのであるが、省察的に思い直し、いや決して「奇妙」なものなどではないはずだと自己把持しようとする。そこに「アクチュアリティ」の感覚が立ち表れていき、なんとか、その「異質」な声、「説明」を要する声、理解してもらいたい声を探し出そうとして、自己省察し、「今ここに自分がある」という感覚を把握しようとし、他者と関わり合おうとする。だが、そのアクチュアリティの姿勢は、オリエンタリズム的なアメリカ帝国主義の言説に絡めとられていくことを知ると、規律規範から「逸脱」していくのである。つまり、敢えて「相対主義であれ」という「呼び掛け」からは偏差していき、

欧米圏を中心とした留学生からの視点による発言から自らの文化を再解釈していく。もちろん日本人も確かに、自分たちの文化を意識し自分たちの経験を話そうと試みていた。むしろ、日本人学生は、自分達のアイデンティティの底流を流れている「文化」がいかに大切であるかを再認識していた。日本人の場合、「思い遣り」や「繋がり」の精神の大切さが日本文化の一つの機微であることを知り、それを日本人同士で抱く。他方、例えばアメリカ人学生の場合、流行や消費社会を形成する大衆文化の「中心」はアメリカであり、日本は「周辺」で、アメリカこそ「真正／オーセンティック」なスタイルであり、日本の大衆文化とは理解するのに困難な、あるいは、幼児的なものではないかと解釈を試みる。そして、オリエンタリズム的な発想も、自分のそうした文化の一つの解釈だと面白可笑しく外側の視点と共有しようとするのである。学生達それぞれの立場から互いに交錯しあいながら、攪乱しあっている、正当性を試みようとしている（クリフォード 2002 [1997]）。

第二に、この日本人学生の内的経験は、主として欧米圏学生という「外」に存在する「他者に開かれたもの」であるという意味で、バタイユの言う「内―外的経験」である（岩野 2010）。その経験は、他者を魅了することもであるが、逆に、違和感や苛立ちを内包する両義的なものだ。戸惑い、当

惑、拒絶感といった情動を中心に、それぞれの立場で自尊心や自尊心という感情も生成されていた。モリス・ブランショ（1997 [1983]）が言うように、「内―外的経験」は、「自己の外」に開かれているゆえ、多様な他者との密な関わりがなされていくと同時に、どこか宙に浮いたような疎外感や孤独感をもたらず経験だ。「交流しよう」としても、グローバルコミュニケーションに無限に張り巡らされている社会的差異によって、各個人は異なる立場に立たされ、孤独感を味わうこととなる。異質な他者との出会いとは、自分自身もまた「異質」であることを思い知る。この相互関係には、「融合」や「繋がり」と同時に、こうした「軋み」ともすれば「対立」をも内包したものである。フリーコー（2004 [2001]）が『主体の解釈学』で力説しているように、自己の生成変化には「生／ビオス」の在り方について、人は多様で異なる「解釈」を生み出だし、その様々な「異質」な解釈を紡ぎ出していくことで、人と人との間で、共感、共鳴、同胞意識、仲間意識という感情を共有する関係になっていくだけでなく、対立、羨望、勝負という感情も内包した関係にもなるのである。他者との「交流」とは、こうした相反する複合的な感情が伴う。海外からの学生達と日本人学生達の「内―外的経験」とは、まさにこうした両義的關係——共感や共鳴を共有できる仲間意識だけではなく、対立や反目という競

争的關係——を凝集させたものであると言える。学生達がお互いに毎回の授業で「深い」対話をしていくことで「笑いあう」ということは、「自分である」と言う感覚が多様に解釈されていくゲームのようなもので、その多様な文化構築がフィクションのようなものであるということを確認している。異質性や孤独感を内包しつつ笑いと同胞感をそのまま彼等彼女達が引き受けた上で、共に「日本」の何かにについて学び合うという仲間同士であることを確認しているのだ。

自分であるという感覚には「他者の欲望」を取り込むことで「欠如感」を抱え込み、そこにアイデンティティが想像されると分析したのはフランスの精神分析医ジャック・ラカンである。つまり、自分が「今ここにある」と認識する時にはすでに「他者」を介在させている。これまでの、日本人学生と海外からの学生との「笑い」とともに「反感」をも内包する時間軸の流れの中で交渉される関係性とは、永遠と満たされることのない「欠如感」を内包したつかみどころの無いものだ。同じ時空間を共にしている際の議論は、アイデンティティ交渉が介在し、互いに他に対し、戸惑いを感じ、違和感を持ち、反発し、抵抗しあいながらなされていく。学生達は、両義的感覚の揺れの中で、確かに構築されたものとしての日本文化を実感しつつも、例えば、「周辺／中心」といった位置付けでは日本の若者文化を理解することはできな

いことを認識していた。そして多様に「異なる」解釈をしあうことで、グローバルに広がる政治的関係性について思考する知識人的スタンスの一端を感じ実践を試みる中で、欠如感としての境界性も感じているのだ。

第三に、こうした政治的に編成されているグローバル資本主義社会での日常を批判的に捉え、その中での日本文化の「現地の視点」を自分なりに把握し「外」に向けて語りを試みようとすることは、困難や境界を伴う。だが、部分的であれ断片的であれ、政治的に意義のある知の在り方だ。他者との「内／外的経験」において、それぞれの学生の対話から、日常の大衆文化に潜む、アメリカ型グローバルイズムの言説による政治的対抗的力学を読み取り、発言していくことで、オリエンタリズム批判にも結びつく知的実践を省察的な形で書くという行為を通じて試みていた。こうした知の実践は、英語圏からの「外」においてのみ理解可能なものになるものが「現地の視点／ローカルノレッジ」などとして、「中心」を欧米の人類学的理解に布置し「周辺」に日本の自社会人類学の理解を位置づけていくような「世界化」¹²の構造を揺るがせていくことにも繋がる (cf. Kuwajima 2004)。それにより、欧米を中枢とする「知」と「政治状況」の「アマルガム／混成状況」の一角を少しでも突き崩す抵抗的姿勢に結びついていく。しかし、この他者達にむけての諸発言には、言語

の意味の決定不確定性を孕む「エクリチュール」(デリダ 2002 [1990]) が作用しており、グローバル状況の広がりにより、加速度的に変化する「状況コンテキスト」の中では、その意味内容自体多様に解釈されていく。この多様性があるからこそ、理解そのものの不可能性が生み出され、更なる説明が求められ、自文化の説明は絶えずまた新たな試みが求められていくのだ。

こうしたグローバル状況の現在、個人は、いかなる立場であろうとも「自分のありのままを語る」という「パレーシア」を実践する立場にある。¹⁹⁾ このパレーシアの言表は、自らが積極的に獲得しようとする意味での「自由」な行為であり、自らが「真理だと考えている」「解釈」を繰り広げていく創造性を伴うものである。日本人若者像の多様な側面、例えば、「かわいい」文化であれ、自分たちの恋愛観であれ、それらの文化が多様に解釈されていく。若者同士の相互理解の不可能性のプロセスの間において、互いに孤独感と差異を感じつつもそこから逸脱し、笑いの渦の中で自らの自意識を見出したり、孤独感や違和感を抱いていくことが続いているのだ。

結語

日本人学生は、自らの文化について「他者」からのオリエンタリズム的な「声」と「眼差し」に対して、批判を試み、反論を実践する困難な作業に取り組む資質を確かに持っている。だが、その批判的実践を通じて「現地の視点」による政治的発言を「他者」を前にして語ることは困難な状況が広がっていた。同じ時空間を共有し、競合しあうという政治的場において、グローバルイズムの中で捏造されたイメージに抵抗して即座に「語ること」を要請されている時、幾重もの日本文化の在り方が絡んでいた。確かに、沈黙、知らぬ素振りなど「外」からの視点からは全く誤解を招いてしまう振る舞いをもってしまいがちになる日本人としての思慮分別が根底にある。また、日本人学生同士でしか「理解できない感情を共有しているのだ」という共通認識すら持っていた。こうした「意図した沈黙」は、「外」の他者達への抵抗的カウンターメッセージにもなりうる。学生達は実際に「外」から様々に関わってくる他者達と対等に話し、関わり合うことを通じて、自分の思っている日本人としての信念や思いや感情を「省察的に」「書く」という行為を通して表現するという「反作用的」な形で表現した。

反グローバルズムやオリエンタリズム批判を試みるとき、多様なグローバル社会での学生達の立ち位置や経験の差異からくる政治的構造が教室の中で形成されている。しかし、日本人学生は受動的な存在ではなかった。実際に対話が重ねられていくと、いかに「溝」や「亀裂」や「異質感」が縦横に展開されようと、共に「今ここ」にある日本人の価値観について理解していこうとする目標を貫こうとする先には、「内」外的経験を通じて、自己の世界が実は一つの文化構築された「フィクション」であり、「今までの自分」とは、欧米圏学生の真理の原則からみれば「パロディ」として解釈が展開する。この「幻想の横断」を通じて初めて、自己を「外」から眺めることを強いられる。そこに日本人学生による、創作活動としての解釈が求められる。一体「今までの自分」は「偽物」であったのかと戸惑いすら感じているのだ。

グローバル社会における共生の思想を試みる教室内での文化交流は、対立感や違和感を抱きしめる中で同胞意識を構成していくという両義的感情を孕んでいた。それぞれの国籍を背負う若者たちは否応なくグローバル資本主義社会の展開の歴史の中に、多様なポリティカルなポジションに配置されている。「他者」との語らいの中で、一連の二律背反的感情の闘ぎあい——違和感と一体感、抵抗する姿勢と同意する姿勢、苛立と安堵、疎外感と自負心、笑いと反感——において

て「自分である」という主体的感覚が生成されていく。日本人学部生と留学生たちとの間で浮かび上がる「若者たちの日本」とは、このような多層的動態的アイデンティティの在り様の一端だ。従って、教室内での小グループでの対話は、決して気まずいものにならず、むしろその平行線を辿って生まれる多様な差異そのものの、様々な解釈を楽しんでいるのだ。文化相対主義的な相互理解には、避けがたく、こうした各学生のアイデンティティ構築に内在するポリティカルな要素とグローバル資本主義社会の歴史が介在している。学生達は、無意識にそれぞれのアイデンティティ構築は多様な解釈ができるのだと言うことを感じているのである。

アイデンティティとは時間の流れの中で他者となされる政治的「交渉／ネゴシエーション」において構築されるものであることを認めることであり、そこにはこうした二律背反した感覚を引き受けていくプロセスの中で構築されている。その上で、オリエンタリズムの表象が、一人の日本人の若者として受け入れ難い異質性を孕んでいるということを「あるがままに」説明しようとするのが不可欠である。そうした「現地の視点」からの「声／ヴォイス」は、そうした表象が、グローバルズムの歴史の流れの中で構築されていった権力構造と連携関係にある捏造物であるということ暴いていく一つの試みになっていくのだ。アイデンティティとは他者との関

係性の中でいかようにも文化的に構築されるものであるがゆえに、否定されたり、嘲笑されたりする脆弱性を伴うものでもある。日本をありのままに説明を試みるところには、このようなグローバルな政治的社会的環境が縦横に走っている。そして、言葉も、意味伝達に不可能性を多分に孕むエクリチュールであり、一つの発言が聞き手によって多様に解釈されていった。意思伝達媒体である言葉そのものに付随される意味内容の複数性に相互理解の限界性が孕んでいた。だからこそ、日本の若者文化について、自分たちの文化の有り様が様々な文化的意味を生成していることを知ることができ、多様な解釈をしていくプロセスを永遠と楽しんでいったのである。若者達はそれぞれの国際状況の異なる「状況コンテキスト」によって、自らの位置や立場から各々解釈していき、多様に受け止めては、自らも自己の立場を逐次確認しつつ発言を試みていった。「自己のありのままを語る」パレーシアを実践する際には、この「他者」との対話の脆さや危うさを孕むが、同時に一つの文化現象は多様な解釈や見方ができるのであって、それらが複数の文化構築体となり、各自がそれぞれの認識の世界観を構築していくのである。

註

(1) 前半のメディアなどで表象される日本人の姿への「西洋」の眼差しに気付いたのは、私自身のアメリカでの滞在経験から来たものである。当初そこには、あくまでアメリカの歴史で作られた白人礼賛主義的な「人種偏見」も込められていると思っていた。「全ての人間は、神によって平等に造られ、譲り渡すことのできない権利を与えられており」と「独立宣言」にあるような「大義」を持つはずの人々の本音の部分では、それとは矛盾する「有色人種」への不平等な扱いが日常茶飯事にまかり通っていることを身をもって知り、憤慨し失望する経験が多々あった。が、他方で、こうした不平等に抵抗し自分の立場を訴えることにより個人というものが形成され確認されていくというアメリカ文化のもう一つの多重の現実を捉えることができるようになるのはしばらく時間がかった。そうした、個人的経験は、実は、「新世界秩序」の歴史、あるいは、グローバリズムの歴史の流れの中において文化的に構築されているものであることが分かり、アイデンティティ・ポリティクスが絡み付いていることを知らされたのは、サイードの『オリエンタリズム』(1993 [1978])を読み、その後、『文化と帝国主義』(ibid 2001 [1993])を読んでからである。個人

の経験がグローバル社会の中で位置づけられていき、知の体系の一部となる興奮と同時に激しい抵抗を覚えた。また、2019年現在「日本」を礼賛する傾向にある言説がメディアや書籍で出されているが、これらは日本人の

「世界観 (world views)」を「現地人からの視点」を検証する際にとる「誰による構築か (Whose construction is it?)」というによる検証によるものというより、むしろ、「日本」を「消費財」として捉えるものが多い。いかなる地域の文化も等しく価値があり、それぞれに優劣は存在せず、敬意に値するものだという文化相対主義の考え方は、アメリカの文化人類学創設者フランツ・ポアズの提唱以来、今日までアメリカの総合大学では必修科目でもある文化人類学のテキストにも強調されている。

(2) アメリカにある日系企業を舞台に展開される日本人のオリエンタリズム的イメージに対して、文化人類学者ドリンヌ・コンドーは徹底的に批判している (Kondo 1997)。

(3) 東京の下町の和菓子屋のフィールドワークによって、パートとして働く女性達と和菓子屋の職人との関係が繰り広げられる職場の生活世界を浮き彫りにしている (Kondo 1990)。例えば、そこには働く男性と女性との間に「情緒的」な繋がりが形成されている様相や、女性

が入り込めない男性による排他的な「精神性」を高める空間から作られるジェンダーヒエラルキーの諸相から、日本社会を記述している。

(4) 日本の会社で一般職や事務職として働く女性達のエスノグラフィーである (Ogasawara 1998)。あたかも家において一家の主である父親が母親の「身の周りの世話」という「母性的ケア」なしには存在できないように、女性社員は男性社員に依存させているという力関係を描写している。

(5) 自分の幼少の時の経験を省察的に記述に挿入しながら、いかにアメリカでの育児観念が日本のそれと異なっているかを議論し、そこで日本の子供達に培われるのは他者への感受性という他律的思考であるということを議論している (恒吉 1993)。

(6) 米澤 (2008) による、現代の日本の若い女性達による化粧やファッションの文化は、日本の文化との関係性については述べられていないが、「自己目的化」している消費文化や、「仲間意識」を作り手段としてのファッションとは、日本文化の作用の中で構築されたものである。

(7) この「現地人」になろうとする自分と、イギリス人女性としての母国において馴染んだ自己であろうとする

自分と葛藤がある。彼女の個人的な経験は、実はアイデンティティの政治性を意味している。日系アメリカ人女性の文化人類学者が東京の主婦の調査をしている際、「現地化」したいのだが、あまりにも周囲が自分を「主婦化」させてくることに抵抗を感じ、調査の途中で米国に一端帰国している。イギリス人留学生の楽しみながらも葛藤も覚える一連の日本での異国である場に「現地化」の試みは、自国の文化が己に自己の内面に刷り込まれているかを体感しているアメリカの文化人類学者の経験と重なるものがある (Kondo 1990)。

(8) 「母性社会」日本を議論している河合隼雄 (1976) は、日本文化とは絶えず歴史を通じて「外」に開かれ、こうした外からの文化を排除していくのではなく、むしろ取り込んできている特徴があると指摘している。そうしたことを踏まえれば、帝国主義的解釈がいかに政治性を帯びたとしても、それも一つの別の解釈として包含してしまうとも言えよう。

(9) この「感情まで理解することはできないのではないか」という問いかけは、文化人類学的な理解とは何かと直接連動する。アメリカの解釈人類学者ギアーツ (Geertz 1987 [1974]) は、「理解とは、感情そのものを共有することではないと言っている。だが、現地の視点か

ら見れば、そうした感情の独特のニュアンスや機微をお互いに共有することが大切で、そこに仲間意識を形成しているのだという信念がある。

(10) 田中 (2009) は他者との関係性にある「権力の作用」によって生まれる「アクチュアリティ」を「教師」と「子供達」との関係を検証し教育学の視点から論じている。

(11) 自ら「故国喪失／エグザイル」の立場を実践し、「アウトサイダー」の立場をとり、「新世界秩序」の暴力に対し絶えず批判し続けたエドワード・サイードが議論するように、「知識人」とは、現体制の組織、グローバル化された日常生活の在り方に対して、疑問符を投げ掛け、批判的に考え発言していくことのできる者としている (1998 [1994])。

(12) 「世界化」とは、ポストコロニアリズムの論客で知られるスピヴァク の概念で、グローバルネットワークで第一世界、特にアメリカを中枢とする権力構造でその支配を正当化させる政治作用を指す (Spivak 2003 [1999])。

(13) 「パレーシア」とは古代ギリシャにおいて「真理だ」ということを語る権利」という意味合いがある (Foucault 2010 [2008])。明らかにこうした姿勢は、西洋の文化の歴史の中に根差したものである。サイードはオリエンタ

リズム批判の実践の時にはそうした西洋的概念や理論を使わなくてはならないとしており、それは皮肉なことであるとも論じている (Saïd 2001 [1993])。

参考文献

- 東浩紀 編 (2010) 『日本的創造力の未来』 N H K ブックス。
- ベネディクト、R (1967 [1946]) 『菊と刀』 長谷川松谷訳、現代教養文庫。
- ブランシヨ、M (1997 [1983]) 『明かしえぬ共同体』 西谷修訳、筑摩書房。(Blanchot, M. *La Communauté Inavouable*. Paris: Editions de Minuit.)
- クライトン、M (1992) 『ライジング・サン』 酒井昭伸訳、早川書房。
- クリフォード、J (2002 [1997]) 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』 毛利嘉孝・有元健他訳、月曜社。(Clifford, J. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.)
- デリダ、J (2008 [2001]) 『条件なき大学』 西山雄二訳、月曜社。(Derrida, J. *L'Université sans Condition*. Paris:

Editions Galilée.)

(2002 [1990]) 『有限責任会社』 高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助 訳、法政大学出版局 (Derrida, J. *Limited Inc.* Paris: Editions Galilée.)

フーコー、M (2004 [2001]) 『主体の解釈学——フーコー・ジュ・ド・フランス講義 1981-1982 年度』 広瀬浩司・原和之訳、筑摩書房。(Foucault, M. *L'Herméneutique Du Sujet - Cours au Collège de France 1981-1982*. Paris: Gallimard/ Le Seuil.)

(2010 [2008]) 『自』と他者の統治——フーコー・ジュ・ド・フランス講義 1981-1982 年度』 阿部崇訳、筑摩書房。(Foucault, M. *Le Gouvernement De Soi Et Des Autres - Cours au Collège de France 1982-1983* Paris: Gallimard/ Le Seuil.)

藤本龍児 (2008) 『アメリカの公共宗教——多元社会における精神性』 NTT出版。

ギアーツ、C (1987 [1974]) 『文化の解釈学 卷Ⅰ・Ⅱ』 吉田禎吾・柳川啓一訳、岩波現代選書。(Geertz, C. *The Interpretations of Cultures*. New York: Basic Books.)

(1999 [1983]) 『ローカル・ノレッジ』 梶原彰昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳、岩波書店。

- Geertz, C. *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*. New York: Basic Books.)
- Gupta, A., and J. Ferguson (1997) Discipline and Practice "The Field" as Site, Method, and Location in Anthropology. *Anthropological Locations: Boundaries and Grounds of a Field Science*. Berkeley: the University of California Press.
- 浜口恵俊 (1988) 『日本への再発見』講談社学術文庫。
- 岩野卓治 (2010) 『ショールベマ・インタロー——神秘経験をめぐる思想の限界と新たな可能性』水声社。
- 河合隼雄 (1976) 『母性社会日本の病理』中公叢書。
- Kinsella, S. (1995) Cuties in Japan. In *Women, Media and Consumption in Japan*. L. Skov & B. Moeran eds. Pp. 220-254. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Kondo, D. K. (1990) *Crafting Selves: Power, Gender and Discourses in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.
- (1997) *About Face. Performing Race in Fashion and Theater*. New York: Routledge
- Iacan, J. (1966) *Ecrits*. New York: W.W.Norton.
- Lebra, T.S. (1976) *Japanese Patterns of Behavior*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Martin, E. (1994) *Flexible Bodies: Tracking Immunity in American Culture and the Days of Polio on the Age of AIDS*. Boston: Beacon Press.
- Ogasawara, Y. (1998) *Office Ladies and Salaried Men: Power, Gender and Work in Japanese Companies*. Los Angeles: University of California Press.
- Ohnuki-Tierney, E. (1997) McDonald's in Japan: Changing Manners and Etiquette. In *Golden Arches East: McDonald's in East Asia*. J. L. Watson ed. Pp. 161-182. Stanford: Stanford University Press.
- Rosaldo, R. (1989) *Culture and Truth: The Remaking of the Social Analysis*. Boston: Beacon Press.
- サージェント, E. (1993 [1978]) 『オリエンタリズム』今沢 保子 訳。平凡社。
- Said, E. *Orientalism*. New York: Random House.)
- (1998 [1994]) 『知識人とは何か』大橋洋一 訳。平凡社。
- Said, E. *Representations of the Intellectual*. New York: Vintage.)
- (2001 [1993]) 『文化への帝国主義』大橋洋一 訳。ちちや書房。
- Said, E. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage)
- スチュアート, J. (2003 [1999]) 『ポストコロニアル

- 理性批判』上村忠男・本橋哲也 訳、月曜社。(Spivak, G.C. *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.)
- 恒吉僚子 (1992) 『人間形成の日米比較』中公新書。
- 谷本奈穂 (2008) 『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。
- 田中智志 (2009) 『教育思想のフーコー——教育を支える関係性』勁草書房。
- 渡辺靖 (2004) 『アフター・アメリカ』慶応義塾大学出版会。
- 米澤泉 (2008) 『コスメの時代——「私遊び」の現代文化論』勁草書房。
- ジジェク, S. (2007 [2000]) 『厄介なる主体』鈴木俊宏・増田久美子訳、青土社。(Zizek, S. *The Ticklish Subject: The Absent Center of Political Ontology*. London: Verso.)